S O T O 禅 インターナショナル

発行日　2000年6月20日
発行人　藤川享胤　　編集責任者　福島伸悦　　編集委員　秋　央文・舘盛寛行
発行所　SOTO禅インターナショナル事務局　〒164-0002 東京都中野区上高田1-27-6
Tel.03-3361-0614　Fax.03-3361-0634　　URL:http:／／www.pa.airnet.ne.jp／szi
郵便振替　00100-6-611195 SOTO禅インターナショナル

Vol.17

総会集合写真

CONTENTS

●巻頭「SZIは何をなすべきか」……SZI会長・山形県般若寺住職　藤川享胤…… 1
●特集／総会講演会ダイジェスト
　仏教の新たな可能性と異文化理解 ……一橋大学社会学部助教授　足羽與志子…… 2
●SZI総会レポート
　北アメリカ開教総監・南アメリカ開教総監両師をお迎えして……SZI事務局　秋　央文…… 4
●前北アメリカ開教総監　山下顕光老師三回忌法要……SZI事務局次長　黒柳博仁…… 4
●パイオニア・ヴァレー禅堂紹介
　「大学坐禅会のこと（下）」……パイオニアヴァレー禅堂堂頭　藤田一照…… 5
●ハワイレポート ……ハワイ開教師　大谷有為…… 6
●「海外禅道場を支援する会」からの手紙 ……同会代表・愛知専門尼僧堂堂長　青山俊董…… 7
●SZI動静報告・会費納入者・寄付者リスト …… 8
●1999年度SZI活動日誌・総会日程 …… 9
●平成11年度SZI収支決算・1999年度SZI事業報告 ……10
●平成12年度SZI収支予算書（案）・2000年度SZI役員並びに事務局員……11
●曹洞宗大本山永平寺ワークショップご案内・講師・藤田一照師略歴……12

巻　頭

ＳＺＩは何をなすべきか

SZI会長・山形県般若寺住職　　藤 川　享 胤

青葉若葉の候、SZI会員の皆様におかれましては益々ご清栄にて、日々ご精進のお暮らしとお察し申し上げます。

去る２月１４日東京グランドホテルで開催された今年度の当会総会も、お蔭様にて近年にない多くの会員の皆様にご出席頂き、前年度の活動報告、決算をご了承頂き、併せて今年度の活動計画、並びに予算案をご承認頂きました。改めて感謝申し上げる次第であります。

さて、近年宗教界に対して社会から大変厳しいご批判があるのは皆様ご承知の通りであります。これはごく一部のいかがわしい宗教団体にのみ向けられたのではなく、当然その矛先は私ども自身に向けられておるものと真摯に受け止めております。しかしながら現実には、どれだけ多くの宗門人が、まがりかどと言うよりは、むしろ危機的状況に直面している宗門の現状を理解しているでありましょうか。

遠い昔、自分一人だけの人間完成を目指すようなちっぽけな教えではなく、広く大衆に教えを広め、苦悩する衆生を等しく救い上げて進む大きな乗り物と誇称した大乗という名目的な金看板に安住して、自分自身の魂を洗うことを忘れ、ただ物質的な自利を求め続けるとするならば、宗門は自ずから２１世紀には生き残れない運命を辿るでありましょう。

さすれば今、SZIは何をなすべきでしょうか。

私はSZIの使命こそ、自ら光り輝く宗門人の育成ではなかろうかと思っております。その人自身から発する光が千里の道を照らし、衆生を済度することが出来る唯一の道と信じるからです。今、海外開教に全力をあげてご奉仕下さっている開教師の皆様と共に、世界に通用する宗門人の育成のためにSZIは全力をあげて参りたいと思っております。

会員の皆様の絶大なるご支援を心よりお願い申し上げます。

特集／総会講演会ダイジェスト

仏教の新たな可能性と異文化理解

一橋大学 社会学部 助教授　足羽 與志子

“異文化理解”と「仏教の現状」について話をしてみたいと思います。
最初に“文化の諸特徴”についてです。構造主義人類学という分野があるのですが、そこでは根本的な文化の特徴を探求しました。簡単に言えば“文化は分類する”という事です。人間から見ると自然は混沌としていて秩序があるように見えません。そこで私たちは現象を「認識」するために分類し、分類項目間の関係として一定の決まりである秩序を導入する、そうした働きが文化である、という考えです。自然の連続音をはっきりと区別して発音することによって“言葉”というものができ、初めて言葉を使ったコミュニケーションができるという事です。
また環境が異なれば認識の仕方も異なってきます。例えばアフリカの遊牧民であるマサイ族にとって非常に大切な生活の糧である牛の色や模様を表す言葉が数多くあります。彼らにはその違いが認識できますが、私たちにはブチや茶色や黒といった数種類の区別しかできません。私には区別がつかなくても彼らは分類でき、そこに重要な秩序があるのです。このように、自然の中の現象を切り取って分類し、認識してそこに意味を与えていくというのが文化の作用であるとされています。
しかしこの分類と差異化は人間に対しても行われます。「我々と彼ら」と区別することです。差異化と同一化が鏡の両面関係にあるのです。この時にいわゆる「文化」と私たちが一般に考えるような慣習やモラルなどが自己と他者を区別する境界線として使われる事もあります。言葉が違う、アクセントが違う、肌の色が違う、マナーが違う、考えや意識が違うなどと、我々は色々な境界線を他者との間に引きます。他者とは差異化を行い、その線の内側では同一化していきます。そしてこのような境界線は、状況に応じて常に塗り替えられています。境界線による差異化と同一化は状況により様々に変化し、モザイクのような状況を作り出しています。
一般的に、その境界線の内側の人々に対しては同一の基準や価値を共有している人間として好意的に接します。しかし、外部の人々に対しては、不可解な基準、異なる価値を持つ非人間的な存在として捉えがちです。戦争の場合には、相手を“他者イメージ”つまり“非人間的なイメージ”で捉える事により、殺戮の正当化を導き出す事がよくあります。それまでは隣国の民族として仲良く交流していたものが、戦争になると「隣の民族は人間ではない」というイメージに変わります。
　米国の日本研究家であるダワーの著作『人種偏見』には、アメリカ軍が使用した、日本人のイメージを描いたポスターが何点か掲載されています。日本軍が中国に侵略した時期のポスターでは、日本人はキングコングのような巨大なゴリラとして描かれています。それが真珠湾攻撃の頃になるとゴキブリのような害虫、そして細菌に変化します。敗戦直後は米兵の腕に抱かれるペットの猿として描かれています。日本軍による欧米軍のイメージ・ポスターについても、敵の非人間化、という戦略においては同じ事が言えます。

足羽先生

　確かにこうした他者認識の背後には、文化操作という仕組みが見えます。また“文化は造られる”という事があります。伝統と思っていた事が、実はそんなに昔から存在したものではなく、経済・政治・ナショナリズム・民族主義・人種主義・ファンダメンタリズムなどの興隆を目的として、つい最近国や企業により意図的に造られたものであったという事もままあります。
８０年代以降、こういった文化というものがアメリカを中心として政治の場面に登場するようになりました。それぞれマイノリティの文化を持つ人々が、自分たちの政治的主張を行うようになったのです。それは多文化主義と呼ばれています。このような状況下では、文化というものは、単に自己と他者とを分けるものだけではなく、政治的な主張を含み、各自の権利を獲得するためのものとなります。この一方で、通信、移動手段の発達がもたらす文化のグローバリゼーションも進んでいます。これはアメリカ文化の世界化とも言われています。
ところで、こうした文化状況のなかで、現代の仏教はどの様な位置にあるのでしょうか。私は仏教も大きな意味での文化の一つだと考えています。一つの価値を巡って、その価値をシステムとして立ち上げていくという点において、現代文化の最も特徴的な性格を備えたものの一つが宗教だと考えます。とくに最近では、“越境する仏教”という事が現代仏教の特色になっていると思います。文化のグローバリゼーションのように、信者や僧侶、書籍などが、国境を越えて移動していきます。これは元々、世界宗教である仏教の特徴かもしれません。最近のティク・ナット・ハンやダライ・ラマなどの活動にもこのような傾向が見られます。
仏教は１８９３年のシカゴ世界宗教者会議で初めて、キリスト教に並びうる正当な宗教として西欧社会に紹介され認知を受けました。そしてこの１００年の間に、それまではキリスト教が絶対的であった西欧社会における宗教の相対化が進みました。西洋社会のごく一部の

学識者だけではなく、一般の知識人や７０年代のカウンター・カルチャーの洗礼を受けた多くの世代が仏教の関心を持ってきた事や、またベトナム、カンボジア、タイ、あるいは中国や台湾といた仏教国からの大量の移民や難民が米国を中心に西洋に流れ込んできた事もその要因の一つです。現在のアメリカ仏教は白人知識階級を中心とし、メディテーションなどを特色とするミッショナリー仏教と、アジアからの移民を中心とするエスニック仏教に大別する研究者もいますが、実際にこの境界による分離が一部ではますます明瞭に、また別の一部では境界が崩れて混在するようになってきています。
現代のアジア諸国での仏教はどのように変化しているでしょうか。おおまかに言って同じ社会の仏教においても“国家が保護統制する仏教”と“信徒を中心とする仏教（市民仏教）”という二つの活動が活発であると指摘できます。タイ・スリランカ・ビルマのように、今世紀において国家建設の過程で中央集権化の政治・社会システム形成とともに、仏教も中央集権化の機構整備が行われ、近代国家と仏教の相互補完関係が強まってくる傾向があります。中国も例外ではなく、革命以後、国内においては宗教を強く抑制する一方では、国外的には仏教使節団の派遣や貴重な仏教美術や仏歯などの「聖物」などの貸与などを通じて、アジアの仏教国と特殊な宗教外交を展開してきました。
また、最近の経済開放以降の仏教復興には目覚ましいものがあり、それは国家の指導による制御という側面と、強い華僑資本とグローバリゼーションにのったネットワークとのリンクによる活性化という強い動機があります。

市民仏教という活動では、アメリカなどで教育を受けたり、西欧文化の影響を受けた中間社会知識層が、古い習慣としてではなく、自らが生活の価値観として“選択した仏教”という新しい仏教に対する積極的な動きも見られます。仏教国に生まれたので仏教徒になる、という事ではなく、自らのライフ・スタイルとしての仏教を選択するというものです。それはとくにライフ・スタイルとしての仏教と言えましょう。そのもっとも重要な特徴がメディテーションです。例えば、ミャンマーのラングーンには、英会話学校と同じくらいの数のメディテーションセンターがあり、人気を博しています。中国でも活発な発展を遂げる寺は禅堂を市民に開放しつつあります。メディテーションに対する若者の人気が非常に高いのです。その他、菜食主義とか慈善事業といった活動も大きな特徴です。

講演会聴衆の皆様

これらは、西欧の仏教とアジアの仏教の相互影響によるものだと考えられます。最近になって始まったテーラワーダ仏教における尼僧戒復活も、仏教の地域や宗派を超えたネットワークや女性を中心とした西欧仏教者とアジアの知識階級の仏教者の積極的な支援、また世界に広がった仏教信者に影響力をもつ強い指導者の援助、そして何よりも仏教を現代社会に適合していくように解放性と活性化が必要である、という強い認識の共有が仏教者のあいだになければ到底実現しなかった動きでしょう。仏教は、今、アジアと欧米という従来の二つの分かれた境界を一挙に超えて相互に流入・流出しています。
最初に述べた文化の差異化・同一化という特徴、文化は創られるものでもあるという特徴、そしてグローバル化する文化という特徴を考慮すると、このような現状の下では、仏教が文化として多くの人々に受け入れられれば受け入れられるほど、また異質な文化に進出すればするほど、常に他者に対してどれだけ仏教が開かれているか、それぞれの仏教がどれほど自己のあり方を「説明」し、他者をあるがままに理解しようと努めるかが求められます。仏教が「西洋化」する、という意味では全くありません。多様な仏教のあり方を示しながらも、人々が生きる社会が抱える問題を仏教がどれほど真剣に考える事ができるか、という事を問いかけることができる仏教、つまりより本質的になることで文化的な普遍性を持つ、という事も可能なのです。
こうしたアジアや欧米における大きな仏教のうねりの中で、日本国内の“伝統仏教”が未だに非常に異質な存在である、という事が大変に懸念されます。日本の仏教が海外の異文化に入っていった場合、色々な問題にぶつかります。例えば、「仏教の中での女性の位置づけ」、「聖職者と信者の関係」、「聖職者の妻帯肉食の説明」、「宗派とはどれほど重要なのか」というような質問を受け続けてきていると思います。とくに最近では仏教に対する知識や多様な実践者、実践集団が急増していくる中、これらは、「日本の仏教の昔からの習慣」として答えがすむような問題ではなくなってきています。日本の仏教が抱えている問題が、海外において異文化に直面したとき明らかになってきていると言えましょう。まず以て日本の中で根本的な捉え直しや整理、あるいはその前に、そういったことが問題とされるのだ、という強い認識が必要でしょう。これは何が良くて何が悪いかという問題ではありません。異文化と接触することにより、自己という姿が他者の目に触れる事によって、これまで認識してこなかった事が、改めて明らかになっていきます。異文化の中でぶつかる問題は、本当は国内で抱えてきた問題でもある、という事がままあります。
私が大学でふれる学生の間にも、信仰の押し付けは嫌だが、生活の指針としての宗教には非常に興味がある、という学生が少なくありません。今後、もし日本国内の仏教が、アジアや欧米の仏教のように「生きた」仏教、あるいは現代文化として人々を引きつけていく仏教となるような意志があるのであれば、ライフスタイルとしての仏教、あるいは生き活動する事の指針となるような仏教という、若者を惹きつける姿を示していく必要があると思われます。社会には充分な受容があり、仏教界には活力への萌芽があると期待します。

SZI総会レポート

北アメリカ開教総監
南アメリカ開教総監
両師をお迎えして

曹洞宗北アメリカ開教総監・秋葉玄吾老師、同じく曹洞宗南アメリカ開教新総監・三好晃一老師、この両師ほど“豪放磊落”という言葉がお似合いの禅僧はいないのではなかろうか……。

南アメリカ開教総監・三好老師(左)に御餞別（SZI会長）

道元禅師シンポジウムの報告をする北アメリカ開教総監　秋葉老師

歯に衣着せぬ語り口もさる事ながら、あっという間に初対面の者を味方に引き込んでしまうお人柄、その屈託のない満身の笑みで周りに華を感じさせる存在感、海外開教という大海原の先導役には、きっとこの様な人を引き付けて止まない魅力が不可欠なのであろう。

周知の通り曹洞宗門における海外開教の現状は、今までも、そしてこれからも決して平坦な道のりばかりではない。ややもすると棘（いばら）の道の方が多いのが現実ではなかろうか。しかしこの両師の豪快な人生観と、そこに裏付けされた確たる自信を拝察する限り、不安よりも期待の方が先立ってしまうのは私だけではないであろう……。　（SZI事務局　秋　央文　記）

前北アメリカ開教総監 山下顕光老師 三回忌法要

去る３月５日、前北アメリカ開教総監で両大本山北米別院禅宗寺９世の故・山下顕光老師（平成10年２月20日遷化）の三回忌法要が同寺で営まれた。日本より總持寺祖院監院の江川辰三老師（写真）が渡米し正当の導師を、また大遠忌事務局東京別院室長の武田秀嗣老師が逮夜の導師をお勤めになり、品位を増崇された。日米の遺族に加え、秋葉玄吾北米総監、町田時保ハワイ総監を始めとする北米、ハワイの開教師、そして大人から子供まで200名を超える檀信徒が参列し、前総監のご遺徳をしのんだ。

故・山下老師は1938年開教師として初めて同別院に赴任した。まもなく日米開戦となり、好ましからざる敵国人（宗教指導者故に）として強制収容に連行されるなど、まさに全米の日系人と運命をともにしてこられた。今日の日系人に対する高い信用や評判が築き上げられてきた苦労の歴史の中に、多くの日系人青少年に差し伸べられてきた老師の暖かなお導きがあった事を人々は忘れない。戦後一時帰国の際には岐阜県関市の大龍寺に集まる青年たちに「君達は皆ドングリである。だからこそ協力せよ。」と民主主義とボランティアの精神をいち早く教え、戦後日本の徨う青年にも生きる勇気を与えた。その青年団は現在、優良建設会社「青協建設」として結実している。初代総監の祥雲晩成老師以来すべての総監に仕えた老師はまた曹洞宗海外開教の歴史を生きてこられた。1971年から自身20余年、北アメリカ開教総監を勤められた。正法希求の輪が民族を超えて広がっていることを喜びながら、夢を後進に託されたのである。

1991年11月に国連本部で講演されたことは、あまり知られていない業績のひとつである。一方、普段着の親しい説示に道を見出した者は数限りない。「あらたまって『和』の話をしてみえるのではないけれど、初めてその場で逢った人たちが、自然のうちに友達になり、仲間になり人の和（輪）が出来あがる。そしてまたそれをいつまでも大切にしなければという気にさせられる」（著書「どんぐりころころ」中の教え子の寄稿文より抜粋）山下老師に重ねて感謝報恩の香を捧げたい。

（SZI事務局次長　黒柳博仁　記）

焼番師をお勤めになる　江川辰三老師

パイオニアヴァレー禅堂　大学坐禅会のこと（下）

マサチューセッツ州　パイオニアヴァレー禅堂堂頭　藤田一照

先日、４月最後の週、三つの大学で今学期最後の坐禅会がありました。こちらの私立大学では５月初めで年度が終わり、それから９月初めまで長い夏休みに入ります。どの大学も車で片道一時間くらいかかるところにありますので、坐禅会のある日は禅堂に帰りつくのが夜の１０時頃になります。さすがに寄る年波には勝てず、だんだんそれが体力的にきつく感じられるようになってきましたから、正直なところ今ほっと一息ついているところです。

とはいっても、若い大学生達と会うのが楽しみなことは確かで、「今年も何とか休みなしで坐禅会を続けられたな」という感慨にひたりながら印象深かった学生達のことを思い返したり、「さて来年度はどんな学生達と出会うことになるのやら」といった想像を楽しみながら、今後の坐禅会のやり方をあれこれ考えたりしています。昨年一年は「姿勢　坐相」のことを特に念頭に置きましたが、自分自身の関心もあって、今年の坐禅会では主に「呼吸　いき」に焦点を当てて坐禅指導やディスカッションをしました。

息については『普勧坐禅儀』にはただ「微息かすかに通ず」とだけしか書かれていません。本当に坐禅が坐禅になっている時にはたしかにこのように言うしかないような息使いになっているのです。それはそうなのですが、実際には力んだ無理な息、荒い息、浅く不規則な息、雑音のある通じの悪い息等々、工夫の余地の多い息使いをしている者が結構多く見られるのです。

今までは坐禅のやりかたの説明のなかで「長い息は長いまま、短い息は短いまま、自然な息をするように」という程度のことしか言ってきませんでした

マウントホリヨーク大学の参禅者と

スミス大学の参禅者と

が、それだけではなかなか改善の効果が見られないのです。自分では自然だと思いこんでいる息使いも実はかなり不自然な息でしかないからです。

さらに坐禅中だけでなく、ひろく日常生活一般においても息使い(深く悠々とした楽な息をしていること)の大切さを伝えたいという思いもあって、今年の参加者には坐禅や経行中、自分の息のありようにとりわけ注意を払うようにと繰り返し指導しました。

そして討論の場でも息の問題を色々取り上げてみました。自分の意思的コントロールによってではなく、息がそれ自身のペースとリズムで自然に出入りしていること。息の動きがが身体の隅々にまで広がっていること。そしてそれを深い注意をもって刻々に体験していること。こういう息使いをどこまで実現できるか。それにどのような意義があるのか。その実現の障害になっている身体的･心理的条件は何か。どのようにすればそれを変容させることができるか・・など。その結果、参加者達も興味をもって取り組んでくれたようですし、私の思い入れのせいかもしれませんが、坐禅・経行中の静寂さの質がだんだん深まってきたという印象をうけました。

大学での坐禅会ではほとんど毎回、数人はいる初体験者相手に坐禅の仕方を短時間で正確に伝えなければなりません。決まりきったインストラクションを繰り返すのではなく、相手を見ながらどう表現するのが一番適切なのかをいつも探っていかなければと心がけていますが、まだまだ納得がいくには程遠いところにいます。来学期は坐禅中に浮かんでくる「思い」をテーマにして、みんなと一緒に参究してみるつもりです。（了）

ハワイレポート

ハワイ開教師（マウイ満徳寺）
ＳＺＩ事務局　大谷 有為

ハワイ開教師として、マウイ島満徳寺に赴任させていただいてから、早２年が過ぎようとしております。

満徳寺に赴任した当時から、最初の１年間を振り返ってみると、青い海と緑の草木・芝生、年間を通しての温暖な気候など、ハワイ特有のすばらしい自然環境の中に身をおきながらも、一方では、島人口の減少、メンバーの高齢化、また、ハワイ観光産業の低迷など、将来的な不安が増大する要因を数多く感じていたことが思い出されます。

確かに、将来的な不安という面では、寺院の存続という意味において、メンバーの数ひとつをとってみても、不安が拭い切れないのは事実です。なぜなら、親と子供の持つ宗教観の違い、マウイ島内の限られた日系檀信徒の数などのあらゆる要因がメンバー数の減少傾向を指すからです。

しかし、その反面、今現在、数多くの年間行事・法要、御詠歌、また、バザーや太鼓といったいろいろなイベントを行っていく上でメンバーと接し、さらには、葬儀の場において、日系１世を見送る日系２世、日系２世を見送る日系３世と直に接することにより、彼らの多くが彼ら自身の手で満徳寺を護持し、発展させていくのだという真剣な自覚を待っていることを肌で感じることができるのも事実です。

満徳寺 本堂

満徳寺 全景

現在、新世代の仏教離れが叫ばれる中、どの海外寺院においても新規メンバーを獲得していくことの重要性は増大していくばかりです。しかし、新たなメンバーの獲得に眼を向けるばかりでなく、先に述べたような既存のメンバーの意識を持続させ、向上させていくことも、重要なことであるのはいうまでもありません。

そうした中で、自分自身が、曹洞宗の海外開教師として、仏教・曹洞宗の教えといったものがありとあらゆるものごとの枠を超える本質的なものであるということ、世界の国々の国境をも越える真のインターナショナルなものであるということを常に再認識しつつ、海外寺院を必要とする多くの人々の需要に応え、さらには次世代の多種多様な民族の要求にも応え、適応していくことが必要であると体感しています。

「海外禅道場を支援する会」からの手紙

同会代表　青　山　俊　董 老師
（愛知専門尼僧堂　堂長）

青山俊董老師

風薫るよき季節となりました。

御尊台各位におかれましてはおすこやかに、御消光の御事と拝察申し上げます。

１９９７年に、海外禅道場を支援する会を発足させ、まず初めに北米のベナージュ大圓師への支援を中心に御協力のお願いを申し上げ、沢山のあたたかい浄財をお寄せいただきましたまま、その後の御報告もせずに月日を過ごしましたことを初めにお詫び申し上げます。全国よりお寄せいただきました浄財の総額は壱千貳百萬円に達しました。厚く御礼申し上げます。

早速に大圓師のもとへ送金したかったのですが、宗教法人の許可がおりるまで待ってほしい、というので、送金を控えておりました。ようやくにして１９９９年４月にアメリカ合衆国より、つづいて１９９９年10月にペンシルバニア州より宗教法人の認可がおり、受け入れ体制がととのったというので、今年、２０００年の２月３日づけで、日本円にして約９００万円を送金させていただきました。それ以前に諸準備金として二度にわたり計１００万円を送ってありますので、総額１０００万円を送らせていただいたことになります。

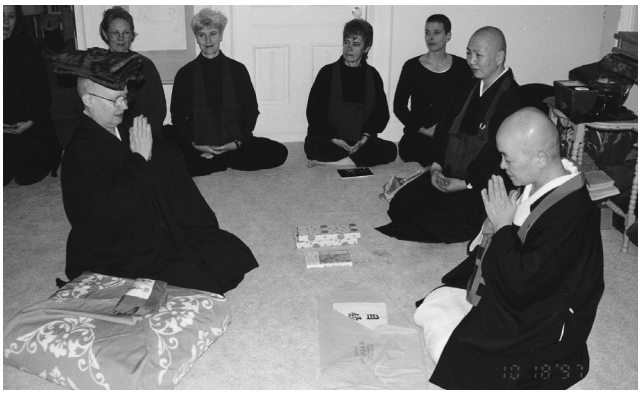
平等山禅堂に集うサンガーの皆さまが、心を一つにして、より充実した禅道場を建設し、日本の皆さまの御法愛にこたえたいと、決意もあらたに精進しておられます。大圓師の弟子の良圓尼も、フランスの浄恵尼と共に、この４月より愛知専門尼僧堂に入堂し、只今熱心に修行しておられます。

ここに大圓師よりの礼状と、簡単な会計報告を添えて、お礼と御報告にかえさせていただきます。

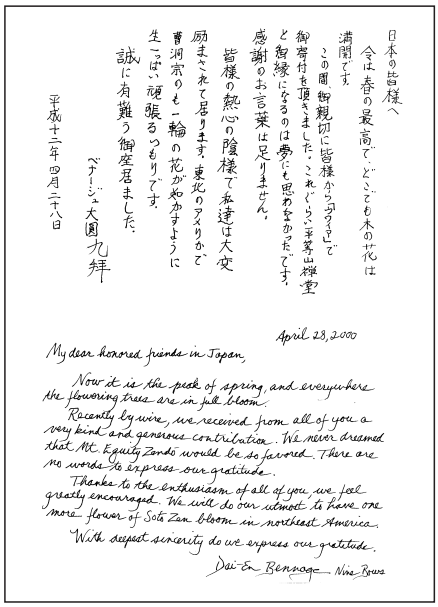
なお、海外禅道場を支援する会は、大圓師の支援をひと区切りとして、もっと幅広い育英活動を展開するため、愛知専門尼僧堂育英会を設立することとなり、そちらへ発展的解消をさせていただくことになりました。設立趣意書をご覧の上、ご理解をたまわり、つづいて御協賛たまわることができれば幸いに存じます。したがいまして、別項会計報告の残金５６万円は、新たに出発した育英会の方へひきつがせて頂くことも、あわせて御了承賜りますようお願い申し上げます。　合掌

平成12年５月

海外禅道場を支援する会
代表　　青山　俊董



ベナージュ大圓師(左)にお袈裟を寄進する青山俊董老師(右)



日本の皆様へ
今は春の最高で、どこも木の花は満開です。
この間、御親切に皆様から「ありがとう」で御寄付を頂きました。これぐらい平等山禅堂と御縁になるのは夢にも思わなかったです。
感謝のお言葉は足りません。
皆様の熱心の陰様で本達は大変励まされて居ります。東北のアメリカで曹洞宗の一輪の花が咲かすように生こうと頑張るつもりです。
誠に有難う御座居ました。
ベナージュ大圓九拝
平成十二年四月二十八日

April 23, 2000
My dear honored friends in Japan,
Now it is the peak of spring, and everywhere the flowering trees are in full bloom.
Recently by wire, we received from all of you a very kind and generous contribution. We never dreamed that Mt. Equity Zendo would be so favored. There are no words to express our gratitude.
Thanks to the enthusiasm of all of you, we feel greatly encouraged. We will do our utmost to have one more flower of Soto Zen bloom in northeast America.
With deepest sincerity do we express our gratitude.
Dai-En Bennage Nun Bows

ベナージュ大圓師からの手紙

＜会計報告＞

収入明細	支援金総収入	12,025,970.-
	受取利息	42,769.-
	合　計	12,068,739.-
支出明細	大圓師へ	9,995,175.-
	北米禅道場巡回・献金	1,000,000.-
	大圓師を迎えてのＳＺＩ合同セミナー	300,000.-
	事務費（印刷・発送など）	210,662.-
	合　計	11,505,837.-
残　高		562,902.-

寄付者・会費納入者名簿

■ＳＺＩ会費納入者

新規会員並びに会員ご継続ありがとうございました。
（敬称略・順不同）
2000年１月１日～４月30日まで

青木哲夫	文京区	妙清寺
青山嶺雲	静岡市	山王寺
石井清純	市川市	
伊藤治雄	名古屋市	万松寺
永心寺	新宿区	
太田賢孝	新宿区	大龍寺内
大場堅司	品川区	
大八木春邦	鶴岡市	保春寺
小笠原隆元	松本市	広沢寺
鬼塚敦	鎌倉市	
小野寺俊寛	世田谷区	
木村恭三	春日井市	安祥寺
木村尚徳	山形市	成安寺
楠俊道	猪苗代町	長照寺
笹川悦導	新宿区	観音庵
佐藤博道	高岡市	明禅寺
佐藤信嗣	印旛郡	
柴山輝行	安中市	宗泉寺
栖川隆道	大阪市	妙壽寺
菅原研州	駒澤大学	竹友寮内
杉山宗和	男鹿市	龍門寺内
関岡俊二	多摩市	高西寺
高橋秀雄	北埼玉郡	広徳寺
瀧澤和夫	新宿区	東長寺
辰巳大勇	京都府	真福寺
舘盛道明	大和市	定方寺
田宮黎友	新潟市	興源寺
長源寺	甲府市	
東光寺	山形県	
中小路冏道	舞鶴市	祥雲寺
中島真澄	足立区	正法庵
中道正信	中津市	寿福寺
中村見自	倉吉市	大岳院
西沢応人	豊島区	祥雲寺
西村英寿	神戸市	長命寺
秦慧孝	杉並区	寶昌寺
花和明雄	茨城県	龍心寺
葉貫成吾	福島県	石雲寺内
福泉寺	横浜市	
細川正善	猪苗代町	天徳寺
松永然道	清水市	宗徳院
森田英仁	千葉市	
山田茂雄	横浜市	

■ＳＺＩ特別寄付

（会費分を除く、敬称略・順不同）
2000年１月１日～４月30日まで

石井清純	市川市	
関岡俊二	多摩市	高西寺
柴山輝行	安中市	宗泉寺
大谷哲夫	新宿区	長泰寺
藤川享胤	鶴岡市	般若寺
中道正信	中津市	寿福寺
武田秀嗣	富士見市	興禅寺
松永然道	清水市	興徳寺
オーシャントラベル		
小笠原隆元	松本市	広沢寺
瀧澤和夫	新宿区	東長寺
大本山永平寺大遠忌局		
市川明雄	府中市	観音寺
永心寺	新宿区	

ＳＺＩ動静報告

１月１日より４月30日まで

１月４日	総会案内発送
１月14日	役員会
２月１日	会報16号発送
２月14日	ＳＺＩ総会　懇親会
３月29日	大本山永平寺 ワークショップ打ち合わせ
４月13日	会報編集会議　駒沢大学
４月23日	事務局懇談会
４月24日	役員会

皆様のホームページ運営中!

SZIホームページでは、活動報告の他、皆様との交流の場を設けています。
SZI.BBS（掲示板）へのご意見・ご質問をスタッフ一同お待ち申し上げます。

http://www.pa.airnet.ne.jp/szi/

SOTO 禅 インターナショナル　２０００年度　総会日程

会　　場　東京グランドホテル　　３Ｆ「菊の間」・「蘭の間」
日　　程　２０００年 2月１４日（月）

午後　１：３０　受付開始
２：００　開教師示寂者追悼会
２：１０　総会
３：００　講演会
演題　「仏教の新たな可能性と異文化理解」
講師　足羽與志子（あしわ よしこ）先生

一橋大学社会学部助教授、文化人類学専攻論文に「ベラワーの民族史」（博士論文、一橋大学）
「国家形成における文化と政治」「王の不在と仏教国家」「スリランカのシンハラの村から」

４：００　質疑応答
５：００　懇親会
＊南アメリカ開教総監　三好晃一老師 壮行会
＊「道元禅師シンポジウム」ご報告
北アメリカ開教総監　秋葉玄吾老師
７：００　記念撮影

以上

２０００年度　総会次第

1. 開会の辞
2. 会長挨拶
3. 来賓挨拶
4. 議長選出
5. 議　　事　（報告・承認事項）
   - 1999 年度事業報告　事務局長
   - 1999 年度会計報告　会　計
   - 1999 年度会計監査報告　監　事
   - 2000 年度事業計画案　事務局長
   - 2000 年度予算計画案　会　計
   - その他
6. 閉会の辞

以上

１９９９年度 SZI 活動日誌

（１９９９年1月1日～１２月３１日）

1月　8日	宗務庁教化部国際課との連絡会議	宗務庁
1月１8日	ベナージュ大円師との懇談会	仏教伝道協会内菩提樹
1月２5日	宗務庁教化部国際課	宗務庁
	北アメリカ開教総監との懇談会	東京グランドホテル
2月　5日	事務局会	大本山總持寺
2月１6日	三好老師帰国慰労会、板垣師壮行会	東京グランドホテル
2月１7日	総　　会	東京グランドホテル
3月　1日	事務局会	東京グランドホテル
3月１6日	地球緑化センター打合せ	
3月３1日	大本山總持寺　紫雲台猊下　拝問	大本山總持寺
4月　5日	役員会	東京グランドホテル
4月１5日	宗務庁教化部国際課との連絡会議	宗務庁
4月１9日	ブラジル日系雑誌社との取材打合せ	大本山總持寺
4月３0日	事務局会	
5月　7日	事務局会	
5月１0日	ＳＺＩ会報１４号発行	
5月２7日	横浜善光寺留学僧育英会１５周年お祝い	横浜プリンスホテル
6月　1日	宗務庁教化部国際課との連絡会議	宗務庁
6月　3日	青木保氏との打合せ	政策研究大学院大学
6月　9日	地球緑化センターの打合せ	
	總持寺にてワークッショプ打合せ	大本山總持寺
6月２2日	秋田新隆老師　ハワイ開教師壮行会	横浜崎陽軒
6月２3日	ワークショップ	大本山總持寺
6月２7日	ＳＺＩ７周年記念懇親会	銀座ナッシュビル
6月２8日	「道元禅師シンポジウム」打合せ	宗務庁
7月２9日	ＳＺＩ会報編集会議	行田　興徳寺
8月１0日	ＳＺＩ会報１５号発行	
8月１9日	会報編集会議	行田　興徳寺
9月　3日	宗務庁国際課と連絡会	宗務庁
9月　4日	大本山永平寺主催「禅といま」協力	有楽町朝日ホール
9月２7日	役員会議	東京グランドホテル
１0月２1日	北アメリカ スタンフォード大学	
～２6日	「道元シンポジウム」 SZI スタディーツアーとして１７名参加	
１0月２7日	第３８回教化学大会発表	駒沢大学
１1月１3日	大船観音寺　「ゆめ観音 IN 大船」に	大船観音寺
	スタッフ６名協力　会報編集会議	
１2月　5日	スタディーツアー参加者写真交換会	銀座 ｸﾙｰｽﾞ･ｸﾙｰｽﾞ
１2月　6日	役員会議	東京グランドホテル
１2月１0日	事務連絡会	大本山總持寺
１2月１5日	会報編集会議	新宿　天龍寺
１2月１9日	事務連絡会	大本山總持寺

以上

１９９９年度ＳＺＩ事業報告

- **研究・自己研鑽事業**　（ワークショップ）

２月１７日　於　　東京グランドホテル「芙蓉」の間
　　講　師　此経 啓助氏　　宗教考現学研究所所長
　　演　題　「宗教をとおした異文化理解」

６月２３日　於　　大本山總持寺
　　ご垂示　大本山總持寺貫主　　板橋興宗禅師
　　講　師　青木　保氏　　政策研究大学院大学教授
　　演　題　「異文化圏理解」

１０月２１日
　～２６日　於　　北アメリカ・スタフォード大学
　　「道元禅師シンポジウム」１７名参加

１０月２７日　於　　駒沢大学
　　第３８回教化学大会にて２名発表

- **布教協力支援事業**

９月　４日　　大本山永平寺主催　シンポジウム「禅といま」へ協力　　７名派遣

１１月１３日　　大船観音寺　　「ゆめ観音ＩＮ大船」へ協力
　　通訳・法要随喜を含め　　６名派遣

１０月２１日　　於　　北アメリカ・スタフォード大学
　～２６日　　「道元禅師シンポジウム」支援・協力

- **海外・会員交流事業**

６月２７日　　ＳＺＩ　７周年記念　　会員懇親会

１０月２１日　　「道元禅師シンポジウム」スタディーツアーにて
　～２６日　　サンフランシスコ桑港寺、禅センターとの交流

１２月　５日　　スタディーツアー参加者写真交換会

- **出版事業**

ＳＺＩ会報発刊　　１４号（５／１０）、１５号（８／１０）

- **広報事業**

ＳＺＩホームページの運営
ＳＺＩカラー広報パンフレット

以上

SOTO禅インターナショナル平成11年度収支決算書

総収入金　　5,088,111 円
総支出金　　5,084,238 円
差引残高　　3,873 円

収入の部

平成１１年１月１日～平成１１年１２月３１日

項　目	本年度予算	決算額	増　減	備　考
会費収入	1,900,000	2,340,000	440,000	年会費（234名）
事業収入	850,000	949,000	99,000	総会会費等
助成金	3,200,000	1,000,000	△ 2,200,000	両本山
雑収入	46,889	646,000	599,111	利子、添菜
繰越金	153,111	153,111	0	前期繰越金
計	6,150,000	5,088,111	△ 1,061,889	

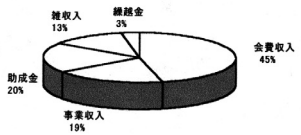
支出の部

項　目	本年度予算	決算額	増　減	備　考
開教支援積立基金	1,500,000	1,400,000	△ 100,000	
事業費	2,000,000	1,605,185	△ 394,815	総会、シンポジウム、講演会等
印刷費	800,000	708,247	△ 91,753	会報、パンフレット等
会議費	450,000	608,526	158,526	各会議費、会議交通費支弁
事務費	350,000	154,560	△ 195,440	事務連絡費、消耗品費、振込手数料
通信費	900,000	465,561	△ 434,439	国際電話・市外電話、会報発送
備品費	60,000	10,900	△ 49,100	ゴム印等
予備費	40,000	90,000	50,000	
渉外費	50,000	41,259	△ 8,741	
計	6,150,000	5,084,238	△ 1,065,762	

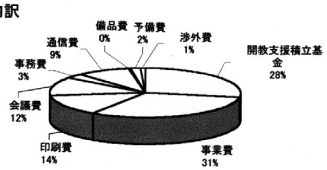
○開教支援積立金　（定期貯金・前年度迄）　6,600,000 円
　　（本年度積立額）　1,400,000 円
　　（定期貯金・本年度累計額）　8,000,000 円

上記の通り決算書を提出いたします　　平成12年2月14日
　　会計　亀野 哲也 ㊞
監査意見書
上記の通り相違ありません。　幹事　細川 正善 ㊞　　西沢 応人 ㊞

収入内訳



支出内訳



２０００年度　役員並びに事務局員

会　　長　藤川享胤　　相 談 役　松永然道・采川道昭
副 会 長　滝沢和夫・福島伸悦
事務局長　飯島尚之　　事務局次長　黒柳博仁
会　　計　亀野哲也　　監　　事　細川正善・西沢応人
事務局員　長田敬道・加藤孝正・浅井宣亮・秋 央文・舘盛寛行・渡辺泰弘
大谷有為（ハワイ）・菅原研州・太田賢孝（敬 称 略）

２０００年度　事業計画　（案）

活動テーマ　「協働」

継 続　事　業

１）宗門緒行事に国内外を問わず、人材・交流・支援事業等にスッタフを派遣。

２）ワークショップの開催　（研究・自己研鑽事業）
第９回　６月２９日を予定　　会 場　大本山永平寺

３）スタディーツアーの企画

４）講演会
２月１４日（月）　午後３時・東京グランドホテル「菊の間」
講　師　足羽與志子（あしわ よしこ）先生
演　題　「仏教の新たな可能性と異文化理解」

５）会報の定期発行　年３回を予定
会報１６号（２／上旬）・会報１７号（７／上旬）・会報１８号（１２／下旬）

６）ホームページ運営の充実

７）教化学大会への参加

８）曹洞宗海外寺院ガイド・ブックレット編纂事業の企画推進

新 規 事 業

１）評議委員会の設立

SOTO禅インターナショナル平成12年度収支予算書（案）

総収入金　4,903,873 円
総支出金　4,903,873 円
差引残高　0 円

収入の部　　平成１２年１月１日～平成１２年１２月３１日

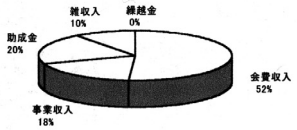
項　目	前年度予算	本年度予算	増　減	備　考
会費収入	1,900,000	2,500,000	600,000	年会費
事業収入	850,000	900,000	50,000	総会会費等
助成金	3,200,000	1,000,000	△ 2,200,000	両本山
雑収入	46,889	500,000	453,111	利子、添菜
繰越金	153,111	3,873	△ 149,238	前期繰越金
計	6,150,000	4,903,873	△ 1,246,127	

支出の部

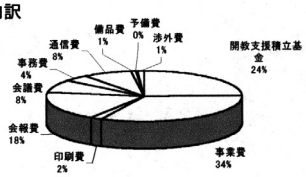
項　目	前年度予算	本年度予算	増　減	備　考
開教支援積立基金	1,500,000	1,200,000	△ 300,000	定期貯金として積立
事業費	2,000,000	1,600,000	△ 400,000	シンポジウム、講演会等
印刷費	800,000	100,000	△ 700,000	各種印刷費
会報費	0	900,000	900,000	会報印刷、発送費、編集会議
会議費	450,000	400,000	△ 50,000	各会議費、会議交通費支弁
事務費	350,000	200,000	△ 150,000	事務連絡費、消耗品費、振込手数料
通信費	900,000	400,000	△ 500,000	
備品費	60,000	30,000	△ 30,000	
予備費	40,000	23,873	△ 16,127	
渉外費	50,000	50,000	0	
計	6,150,000	4,903,873	△ 1,246,127	

上記の通り予算書を提出いたします
平成12年2月14 日
SOTO禅インターナショナル
会計　　亀野　哲也

収入内訳



支出内訳



「高祖道元禅師ご生誕800年記念慶賛」

ＳＺＩワークショップのご案内

テーマ　「アメリカで生きる曹洞禅」
　　曹洞禅の異文化コミュニケーションを考える。
講　師　米国 パイオニアヴァレー禅堂　堂頭　藤田一照師

世界の人々の生活は相互に依存し、影響を及ぼし合う地球時代を迎えています。
このような時代、「異文化」をどう理解するかは、国内外を問わず未来に向けた布教活動の重要なファクターとなりました。
そこで高祖道元禅師の「禅」をとおし、海外での布教現状をもっと知って頂き、その結果として相互の布教活動が活性化できる環境整備に貢献できればと思います。

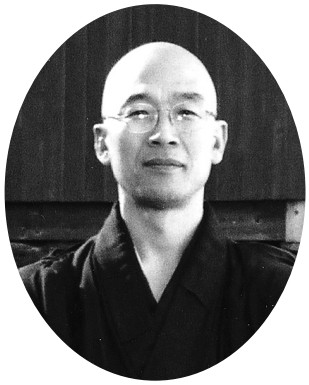
日　　時　平成12年　6月29日（木）　正午受付開始
場　　所　大本山永平寺　大講堂
　　海外布教について　ＳＺＩ会長
　　14時　講　演　質疑応答
　　16時　閉　講
会　　費　無　料
企画主催　SOTO禅インターナショナル／SZI
共　　催　大本山永平寺
後　　援　大遠忌局

どなたでも参加できます。参加希望者は、「住所・氏名・電話番号」をご記入の上、ハガキ又はＦＡＸでお申し込みください。

〒164-0002　東京都中野区上高田１-27-６　宗清寺内
ＳＯＴＯ禅インターナショナル事務局　まで
FAX.０３-３３６１-０６３４

ＳＺＩから皆様へ御願い

藤田一照師は、6月中旬より8月上旬まで日本に滞在いたします。皆様の教区・青年会・地域等の勉強会に講師としてお迎え頂ければ、海外布教支援にもなりますのでよろしくご検討願います。詳細は、ＳＺＩ事務局までお問い合わせください。



藤田一照師略歴

1954年愛媛県新居浜市生まれ。東京大学大学院にて発達心理学を専攻。在学中、東洋医学の師より坐禅を勧められ鎌倉円覚寺居士林の学生接心にて坐禅を初体験する。以後、坐禅を専一に行じたいという思いがつのり、28歳で学校を中退。参禅していた臨済宗の老師の勧めで兵庫県浜坂町の曹洞宗安泰寺に入山。翌年渡部耕法師の下で得度し修行生活を送る。博多の明光寺専門僧堂に一年安居のあと1987年師の指示により米国マサチューセッツ州西部にあるパイオニアヴァレー禅堂に修行の場を移し現在にいたる。ヴァレー禅堂のほかに大学や他の佛教センターでも坐禅指導や講演を行っている。論文に『アメリカ禅堂通信』『ヴァレー禅堂雑想録』『私の坐禅参究帳』（いずれも『大法輪』連載）など。共著に『新こころのシルクロード』（佐賀新聞社）。日本人の妻と二人の娘がいる。